

猿ばんどんつ

昭和五十五年一月一日号

大洲中学校の北側から大洲新田に通じる細い山道があります。おかしは、大洲本村や中野村から大洲新田へいく、たつた一本の道でしたが、細い道の両側は、うす暗いほどの林になつていました。

ですから村の人たちは、ここを通るのがなんとなくいやでした。その林の中に、いつか一匹のずるがしい大猿がすみついていました。猿のおれから仲間はずれにされて、一人ぼっちですんでいたのです。だんだん心がささんだのか、悪いいたずらをするようになりました。この道は、すこし坂道になつていて、中ほどに大きなケヤキの木がありました。そ

の枝が道の上においかぶさつて道をなお暗くしていました。

大猿が火打ち石で火遊び

その大猿は、どこでおぼえたのか、火打ち石で火をおこすことを知っていました。あるとき、そのケヤキの木にのぼつて、人の通るのを待つていました。しばらくすると、一人の女の人が荷物をしょつて下を通つたので、大猿は、ツケ木に火をつけて、女の人のまから落としました。頭の上から火が降つてきたので、びつくりした女の人は、悲鳴をあげてにげていきました。

猿は、それが面白くて、たまらなかつたので、それから毎日いたずらをくり返して、通行人をおどかしていました。

猿のいたずらが、だんだん評判になつて、火を落として通る人をおどろかしたのは、大猿のしわざとわかりましたので、村人は大勢で猿を追い回して、とうとう生けどりにしてしまいました。

命乞いし、道の番を

人々が「殺してしまおう」というのを聞いた大猿は、両手でおがみながら「これからは、決していたずらしないから」といいました。「こんどやったら、殺してしまつぞ」というと、大猿は、涙を流してあやまりました。

殺すのも、ふびんだと思つた村人は、その

まま放してやりました。

それから間もなく、この大猿は、毎日ケヤキの根もとの大きな石にすわつて、道の番をするようになりましたので、中野村から大淵新田へいく人たちは、うす暗い道でしたが、安心して通るようになったといひます。

いつか、この坂道を人々は「猿番道」(さるばんどう)と呼ぶようになりました。

